

C.S. ルイスと戯曲『シャドウランズ』

野呂有子

1989年10月23日、ロンドンのクイーンズ・シアターで初日をむかえた『シャドウランズ』の観客席は、嗚咽とすすり泣きに満ちていた。50代半ばと思われるインテリ風の、きちんと盛装した男性が、大きな音をたてて鼻をかんでいる姿もあちこちで見られたという。終幕も間近、舞台は骨髄癌で妻を失ったジャック（C.S.ルイスの愛称）が、妻の連れ子のダグラスと悲しみを分かちあうシーンから、観客に語りかけるシーン、そして亡き妻へ語りかける大詰めシーンへと移行している。

William Nicholson 作の戯曲 *Shadowlands* の魅力は、この戯曲が実在の人物 C.S. Lewis (1898-1963) の実人生をもとにしているという点にある。テーマは、ルイスとユダヤ系アメリカ女性、Joy Davidman (1915-60) との出会いから結婚、死別までの過程である。

ルイスは、オクスフォード大学の特別研究員を務め、のち、ケンブリッジ大学の教授となった。学者、研究者、批評家、平信徒説教者、小説家、SF作家、とくに *The Lion, the Witch and the Wardrobe* (1950) をはじめとする *The Chronicles of Narnia* 七部作 (1950-56) の作者としてわが国ではよく知られている文学者である。だが、その素顔、特にジョイとのかかわりは意外に知られていない。

実在の二人の関係は、作家と愛読者の文通というかたちで始まるが、ジョイの渡英、そして二人の出会いという局面を迎えて、新たな展開を見せる。ルイスはジョイにクリスマス休暇をオクスフォードの自宅で過ごすことを提案し、ジョイはこれを受け入れる。ルイスは兄と二人暮らしをしている。ジョイはそこに滞在する。ジョイはいったん帰国して夫と離婚、再びオクスフォードに息子二人を連れてやってくる。今度は一時の滞在ではない。引っ越して来たのである。やがて二人は「法律上、もしくは便宜上」結婚をする。英国政府がジョイの市民権を認めなかったためである。だが同居はしない。その後ジョイは骨髄癌に倒れる。入院後、二人は病室で—「神の祝福を受けて」結婚の式をあげる。この後ジョイは奇跡的に小康状態を得る。二人は3年間、幸福な結婚生活を送ることになる。庭でくつろぐ妻を見やりながらルイスは、友人の Nevil Coghill に語ったという—「20代でつかみそこなった幸福を、60代で得ることになるとは予想もしなかった」と (Roger L. Green & Walter Hooper, *C. S. Lewis : A Biography*, 1974)。やがて病は再発し、ジョイは不帰の人となる。

戯曲『シャドウランズ』には、「真実の愛の物語」という副題がつけられている。ここには二つの意味がこめられている。ひとつは、いうまでもなくルイスとジョイとの愛である。ジョイは「ユダヤ人で、離婚歴があり、文無し。おまけに癌で死にかけている」。いっぽう、ルイスは「おろかで臆病な老人、口ではいえないほど君を必要とし愛しているのに、どうしたらよいかもわからない老人」なのである。しかし、この二人のあいだには、外見や年齢、地位や立場などの既成概念からは自由な魂の交流が存在する。ミルトンが『離婚の理論と実践』(1643)において提唱した理想の夫婦愛の形である。だが、ミルトンも主張するように、理想の夫婦愛とはそもそも、神の愛なくしては成り立ちえない。副題にある「真実の愛」とは、ルイスとジョイの愛を裏づける、神の愛をも指している。

J. R. R. Tolkien (1892-1973) が述べたといわれるように、ルイスはジョイに「だまされた」(Green & Hooper, *op. cit.*) のかもしれない。しかし『シャドウランズ』の作者ニコルソンはそうは解釈しなかった。あらゆる人間の思いをこえて、すべては神の摂理の内にあるという解釈を、この二人の「奇妙な」愛の形に与えたのである。アリストテレスのいう「哀れみと恐れ」の感情が引き起こされる所以はここにある。すなわち、劇中、二人の愛は二人だけのセンチメンタルな関係に終始してはいない。神の摂理という普遍的枠組みの中で描かれているがゆえに、観客の側に普遍的共感呼び起こすのである。

ルイスは、神の愛と人の愛について精力的に執筆した。説教者としてたぐいまれな雄弁な人物であった。そのルイスをニコルソンは、実際の恋愛においておずおずと戸惑う少年のごとき人物として提示する。その姿は観客の微笑をさそう。ルイスは終始、ジョイの満ち潮のごときエネルギーに押しまわられていく。実際の二人も「たぶんこんな風であったかもしれない」(*Listener* 誌劇評) と観客に感じさせる、ニコルソンの人間観察は鋭く、洞察は深い。

そのルイスが、ひとたび、ジョイにたいする真実の愛を自覚するや、決然とした態度を示し、英国国教会信徒でありながら、離婚歴の持つ婦人と公然と結婚するというのはなれわざをやったのける。ルイスの愛はジ

ジョイの内に奇跡を起こさせる。心から愛されているという確信をえたジョイの癌の進行が、一時的に止まるのである。

観客の同化作用をうながし、舞台に引きこんでいくニコルソンの手並みは秀逸である。彼が採用している手法のうちの一つとして、漸層法^{グラデーション}があげられる。例をあげよう。神の愛と痛みの問題についてルイスが観客に語りかける場面が、劇全体を通して三度ある。第一幕の冒頭と第二幕の冒頭、そして劇の終結部である。

第一幕の冒頭、ルイスは、英国人にとっておそらくもっともなじみ深い姿で、すなわち、説教者として登場する。彼は観客を聴衆にみだて、「もし、神がわれわれを愛するなら、なぜ神はわれわれをかくも苦しめたまうのか」という問いを發し、それに答えようとする。痛みとは「耳の遠くなった世界を呼び起こすための神のメガフォンなのである」という、*The Problem of Pain*(1940)の中でもっとも有名なことばを發する。そして「神はわれわれを愛すればこそ、苦しみという贈り物をあたえたまうのである。…この世界は『影の国』^{シャドウランズ}に過ぎない。本当の人生はまだ始まっていないのである」と結論づける。この時点でのルイスは、「快適な独身生活を営む中年男性」である。彼のことは自信と信念に満ちているが、「痛み」は、まだ彼自身にとってそれほど身近なものではない。

第二幕の冒頭では、おさまりの説教の中にルイス自身の悩みと苦しみが侵入してくる。「友人」としてジョイの苦境を救うために形式的な結婚をしたルイスであるが、その「友人」が不治の病に倒れたいま、神の愛と痛みという問題を自分自身に関わりあるものとしてとらえざるを得ない。内面の混乱を抑えられないルイスの説教は、体をなさない。「われわれはひと塊の石である。かの彫刻家[神]はそこに人の形を彫り刻むのである。神のふりおろすノミはわれわれをひどく苦しめる。だが、それによりわれわれはまったきものとなるのである」という自分自身のことばを、なんとか信じようとする人間ルイスの苦悩する姿が提示される。

終幕近く、ルイスは聴衆におかっている—「結局、ジャック・ルイスは質問に答えられなかったではないかといってくださいとも構いません。でもこれだけはいわせてください。わたくしはこれまでに二度、選択を迫られたことがあります。子どもだったわたくしは安全を選びました。いま、大人になったわたくしは苦しみに耐えることを選んだのであります」と。そして、亡き妻におかっている—「ぼくはこの痛みを友として生きていくことができるよ。いまこの痛みは、あの時の幸福の一部なんだよね。そういう約束だったんだ。ただ、影^{シャドウ}にすぎないんだよね、ジョイ」と。

ルイスの説教は回を重ねるにつれ崩れていく。ルイスの「痛み」の原因となる人物は、赤の他人から「友人」へ、そして「最愛の妻」へと変化していく。存在がより近いものとなるにつれ、ルイスの苦悩も深まっていく。そして、観客もまたルイスの苦悩を、一層身近なものとしてとらえるのである。

ルイスの最後のことば—「この世は影の国^{シャドウランズ}にすぎない」という亡き妻への語りかけ—を通して、観客はつかのま、ルイスとともに永遠不滅の世界をかいま見る。なぜならルイスによれば、「現実のこの世界は、『天国』(光の国)の投影によってできる『影の国』(写しの国)であり、地上のものは『天上界の影』にすぎない」からである(柳生望『『シャドウランズ』における『ナルニア国物語』』、『ラ・アルプ』1991年9月号)。

『シャドウランズ』の魅力は現実をもとにした点にある、と述べた。しかし、ただ事実を並べただけで感動が生まれるわけではない。優れた作家の手法によってそれが芸術の域にまで高められた時に感動が生まれる。さきの漸層法も、その意味で重要である。虚構により作品の完成度が高められるからである。『ナルニア国年代記』第6作 *The Magician's Nephew*(1955)を見てみよう。この作品は劇中、重要な役割を果たしている。ルイスがジョイと初めて出会うシーンで、Douglas(1945-)はこの本を手を登場し、ルイスは請われてこれに署名するが、これは虚構である。現実の彼らの出会いは1953年に始まる。『魔術師のおい』はまだ出版されていない。しかし、劇中このシーンは必要不可欠である。これに続くルイスとダグラスの会話も、劇を盛り上げる重要な伏線となる。また、現実にはダグラスにはDavidという兄がいるが、劇にはダグラスのみが登場する。かりに二人がともに登場したとすればどうか。緊密性は崩れ、焦点はぼやけるであろう。さらに、劇中ではジョイの亡くなった時点でのダグラスの年齢は、ルイスとジョイが初めて出会った時のままの年齢、すなわち8歳と指定されている。しかし現実には、ルイスとジョイの出会いから死にいたるまでには約7年が経過している。ジョイが亡くなった時、現実のダグラスは15歳であった。

このように見てくると、劇中のダグラスは、実在のダグラスというよりもむしろ、ルイスの心の中で、母の死とともに成長することを止めていた少年のままのルイスの分身であると考えたほうが妥当であろう。(現実の母

の死はルイスが9歳のとき。)成長を止めていたルイスの心の中の少年は、ジョイを愛し、その苦しみを見つめ、その死を乗り越えることによって、母の死をも乗り越えたのである。そして、こうした体験を経たればこそ、ルイスの著作活動は一層豊かなものとなっていったと考えられる。たとえば *Till We Have Faces*(1956)は、ジョイのキリスト教への回帰が骨子となっているといわれる。*The four Loves*(1960)では、それまでルイスが避けてきた性愛の問題が率直に語られている。偽名で出版された *The Grief Observed*(1961)は、まさにジョイを失った悲しみを見つめ続けて生まれた作品に他ならない。また自伝の題名 *Surprised by Joy*(1955;直訳すれば、『^{ジョイ}喜びに襲撃されて』)となる。ウィリアム・ワーズワースの有名な詩の一節にちなむ)は、ジョイとの運命的な出会いを考える時、きわめて象徴的である。『シャドウランズ』は開幕後、一年間のロングランを経て、ブロードウェイでも上演された。主演のナイジェル・ホーソンはトニー賞を受賞している。

劇団『四季』が1991年11月、12月にこの『シャドウランズ』を上演するという。翻訳劇の宿命と制約のもとで、どこまで日本人の心に響く「真実の愛の物語」を再現するか、興味のあるところである。